

10月15日

Copyright: Takumin

二つのレプリゼンテーションを見ていく。一つは合理的レプリゼンテーション、もう一つは非合理的レプリゼンテーションである。後者においてヨーロッパでは宗教が常に問題になる。この世の中を合理的に説明し支配できると考えるようになったのは最近になってから。それ以前は多くの事柄を合理的に説明することができなかった。様々な現象を様々な非合理的言説に依拠して説明しようとしてきた。そういった前近代的な状況において何が正当性の根拠・説明の枠組みになるか。一つは宗教。全知全能の神が全てを作ったという説明。もう一つはロゴス。何らかの原理がこの世界に働いていて我々はそれに従っているというもの。このような枠組みが人々の意識を支配していた時代がある。二つのパラダイムが融合する形でレジティマシーの言説が構成される。現代において非合理的レプリゼンテーションがすべて否定されているわけではない。例えばナチス。組織は非常に合理的に作られているが、非合理的な言説を信じていた。今日も様々な非合理的言説があり、ときとして一定の政治的作用を及ぼすことがある。この講義では様々なシンボルを分析して、それがどのような政治的作用を及ぼしたかを着目する。合理的なシンボルと非合理的なメタファーを同時に利用する点にナポレオンの支配の巧妙さがあった。それまでフランスは革命以来混乱していたがナポレオンがそれを統一し、安定をもたらす。なぜそれがうまく行ったのかはいずれ話すが、重要なのは非合理的メタファーと合理シンボルが融合している点。プリントの Lex regia について。これは合理的言説の原型となったものである。即ち法の支配を意味する。ローマ法がヨーロッパ中世において積極的に受容されることになる。ローマ法がベースになって様々な法律が構築されることになる。ヨーロッパにはキリストの伝統があるが他方に法の伝統がある。ここで何が言われているのか。政治においては言説がどのように操作されるかということが非常に重要である。ある言説をどのように解釈するかによってその現象・現実が変わってくる。よって支配者は言説を自分の都合がいいように操作する。例えば冷戦期には西側と東側でデモグラシーの解釈を争っていた。ローマ法、Lex regia も様々な形で操作された。世の中には協力に人々の心に響く言葉がある。その強力なシンボルをうまく操ると権力を獲得することができる。人民主権を主張する人も絶対王制を主張する人も同じローマ法を利用しようとした。ここで重要なのはローマ法が権威を有していたことである。Lex regia の Lex は法、regia は王を意味する。王の意思は法であるとローマ法の格言は述べており、王様に非常に都合のよい原理である。だがこの言葉には続きがある。王の意思は法である、君主の権力は人民に由来する。これがローマ法で謳われている。この構文が様々な支配者によって様々な形で利用される。注目すべきは cum という言葉。ラテン語を素直に解釈するとこの人民が君主に権力を移譲したから君主は政治権力を持つということになる。cum は because と訳される。その解釈を重視すると君主は絶対的な権力を掌握していることになる。それを正当化する原理と一方で解される。絶対王制を目指した君主たちはこの原理に訴えた。13世紀にブラクトンが登場する。彼はこの解釈をうまく変える。ラテン語の cum は前置詞でもある。in accordance with という意味にもなる。そうすると君主は全ての権力を有する、人民が定めた王法に従って王が統治することになるから、となる。重要なのは同じ方分がいろんな解釈を可能にすることであり、一方で絶対的権力を擁護する言説にもなり、他方で人民主権を擁護する言説にもなり

うること。これが合理的な言説のもっとも代表的な例である。こういった言説と非合理的言説が融合することになるが、非合理的言説について具体的に見ていく。我々は人体のメタファーに着目する必要がある。レジュメに人体のメタファーと君主の・・・というセクションがある。つまり国家と人体をパラレルに述べるというもの。人間には三つの魂がある。それがうまく社会の構造と対応しているとした。理知的な部分が支配階級、気概的部分は軍人、欲望的な部分は生産者階級。これがうまくバランスするためには人間と同様理知的な部分、つまり支配階級が支配せねばならないということになる。統治者が兵士と庶民を支配するのが正しい社会の在り方であるということになる。人間の構造と国家の構造が対応しているというメタファーがここで見られる。こういった原型がいろんな思想家や政治家によって様々な仕方で操作される。ストア派のメタファーについて説明する。プラトンは人間と国家を対応させたが、ストア派は宇宙全体の構造と人間の構造が対応していると考えた。宇宙全体が人体のような機能を有しているということ。それがさらに発展するとマクロコスモスがまず存在し、その中に人間が生まれおち、小さい存在の人間であるが、その人間の中にも宇宙があると彼らは考えた。ミクロコスモスとしての人間とマクロコスモスとしての宇宙は対応している、調和していると考えられた。人間は宇宙の法則とうまく連動しているという考え。ストア派はポリスなどの小さな共同体を越えて人類的な共同体を想定する(コスモポリタン)。だから彼らはナショナリスト的な考えを排除した。ギリシャ人はギリシャ人と非ギリシャ人を区別し軽蔑していたが従来の考えを否定して皆同じだと訴えた。この言説が中世に継承されていく。キリスト教という宗教から出てくるメタファーも非常に重要である。キリスト教がヨーロッパ世界においてもっとも重要な世界観として受容されることになる。全てをキリスト教の枠組み、原理に従って説明しようとした。なぜならキリスト教の神は全知全能の大きな存在であったため。我々は通常これは偶然の産物だと考えるが当時は神の枠組みだと考えた。ギリシャ人は時間は循環するものだと考えていたが、キリスト教とは始まりと終わりがあることを前提にしていた。

神様が教皇に宗教的権力を授けると、教皇はペテロの後継者とみなされ宗教的権力を保持することになる。神は政治的権力は王に授ける。王は政治的に支配する権限を有する、そしてこのようにキリスト教の言説に依拠することによって自らの権力を正当化することが可能であった。だが、この関係が確立したのが 9 世紀といわれている。中世は教皇と君主の協力関係が成立した時代だといわれる。だが、その後教皇と君主のライバル関係が生まれてくる。王は政治権力および教皇を選択する権利があると主張し、教皇は神は自分に全ての権限を渡し、教皇が王に政治権力をかしたのだと主張した。どれだけ多くの人間を説得するかによって世の中が変わってくることになる。自分の立場を言説によって主張することが決定的に重要になってくる。権力の淵源が神であることは共通の了解だが、教皇は自分がペテロの後継者であるが故にキリストの代理だと主張することができる。これは非常に強力な言説であったが 12 世紀になると王権側は聖書とローマ法を融合させることによって新たな正当性の理論を構築することになる。それによると王様もキリストの代理人ということになる。王権側はさらに神の代理人と主張し、神の子であるキリストの代理人である教皇よりも偉いという主張を展開した。この論争に勝った方が権力をつかむため、当時は真剣に正当性をめぐる闘争が行われた。

